不易と流行

宮崎県教育庁北部教育事務所
教育推進課　指導主事　黒木　大輔

東京オリンピック・パラリンピックが開催されるはずだった２０２０年、全世界、そして日本が新型コロナウイルス感染症への対応に追われる状況が想像できた方は誰１人としていなかったのではないでしょうか。２０２０年末の現在においても、連日のように感染状況や感染防止対策がトップニュースとして報道されるなど、コロナ禍において刻々と変わる感染状況で先の見通しが難しい状況が続いています。

学校においては一斉休校や臨時休業等が実施される中、私は２０２０年の４月に北部教育事務所に着任し、教育行政を担う一員として、へき地・小規模校の担当となりました。当たり前だったこれまでの学校生活が当たり前でなくなっていく現実に戸惑いながら、児童生徒のために必死になって対応される学校現場の教職員の方々の状況や児童生徒の様子を見聞きし、教育事務所の一員としてどのような支援等ができるか思い悩む毎日でした。

６月より、へき地・小規模校への学校訪問が始まりました。そこで目にした光景は、これまでと変わらない教職員の方々の児童生徒へのあふれる情熱や学校と地域との強いつながり、そして、現在の状況を今後の教育に生かそうとするまさに不易と流行の姿でした。

フェイスシールドを準備し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、少人数ならではのきめ細やかな授業を展開する様子。見学に行けない児童生徒のかわりに地域に出向き、写真をとり、関係者にインタビューをし、それを教材として提示しながら地域の防災について考えさせる授業。これまでにも増して手指消毒に細心の注意をはらいながら給食配膳の様子を見守る姿。温かいまなざしで集団登校の児童につきそうマスク姿の地域の高齢者の方々とその登校班を出迎えるマスク姿の教職員の方々。そこには、新しい生活様式を踏まえながらも、これまで同様、へき地・小規模校の強みを最大限に生かして児童生徒に教育を行う教職員の方々の姿がありました。

さらに、この状況において整備されたタブレット端末等の ICT を活用した授業も多くの学校で参観することができました。小学校低学年の児童が使い慣れた様子で算数の形づくりの学習を行い、大型テレビに映して発表をする姿。社会の時間、自分の考えの根拠となる資料を撮影し、学級全体に提示して発表をする姿。へき地・小規模校同士をオンラインでつなぎ、授業を行う実践もあったと聞きました。コロナ禍においてできなくなったことを嘆くのではなく、この状況だからこそ児童生徒に身に付けさせたいスキルや学習方法を積極的に取り入れて教育を展開しようとする前向きな学校現場の姿に頭が下がりました。

「へき地教育は教育の原点」という言葉は私が学生の頃から聞いておりました。少人数での学習、学び合う場の設定、学習への構えの徹底というこれまでのへき地・小規模校の特性

を生かした教育だけでなく、新たな生活様式を踏まえた教育へのアップデートもへき地・小規模校の教育実践から感じた次第です。

さて、次年度は「神話の里　みやざきで　ふるさとの未来を創る　子どもを育てよう！」のスローガンのもと、「創立第７０周年記念全国へき地教育研究大会宮崎大会」が開催される予定です。大会関係者の方々につきましては、新型コロナウイルスの感染状況を注視しながらご準備をいただいております。公開授業を行う学校につきましては、それぞれが独自の研究主題のもと、次年度に向けて試行錯誤の日々かと思います。へき地・小規模校の担当指導主事としまして、児童生徒のために日々教育活動に邁進する教職員の方々との対話を充実させながら、これまで以上に市町村及び学校へ支援等に努める所存です。大会の研究主題である「ふるさとで主体的に学び、確かな学力・表現力を基盤に、未来の創り手となる子どもの育成」について協議、授業公開を通して共に学んでいきたいと考えています。

最後になりましたが、へき地・小規模校において、愛情をもって児童生徒と共に学び続け、挑戦されている教職員の方々、また、その学校を支える地域の方々に敬意を表します。今後とも本県のへき地・小規模校の教育をよろしくお願いします。